

李朝末期朝鮮における資本主義萌芽の問題

梶村秀樹

ふじやゆき 269
(1974.9.22)

八月十七日、十八日の両日、梶村秀樹氏を講師として、むくばの金夏季合宿記座を開きました。内容は「李朝末期朝鮮における資本主義萌芽の問題」、「三・一運動以後の朝鮮民族解放闘争」、「解放後の朝鮮へ一九四五～五〇年の年」の三つですが、ここでは資本主義萌芽の問題をとり上げ、講演内容を掲載します。梶村氏は特に難しい言葉はできるだけ避け、たとえ話を数多くありませて講演されたのですが、紙面の関係上多少短かくしたため、解りにくくなっている点お断りしておきます。文責はむくげの会にあります。

1. なぜこのテーマが重要か

このテーマがなぜ重要なのかということを、最初にお話してみたいと思います。それはひとことで言えば、わがめられた朝鮮史、そしてそこからくり朝鮮民族はダメな遅れた民族なんだ、というようなイメージが、間違っていることをわからせらるための一つのキーポイントになるのが、このテ

ーマだと思います。

朝鮮の歴史家が、なぜこのテーマに率先に取り組んだのかというのも、これに関係しています。このような誤った固定観念は、日本人にのみ教え込まれたわけではなく、朝鮮人にも朝鮮総督府の教育でも、一九四五年まで徹底して教えられた。だから、朝鮮人自身が、それが本当であると思、てしそうことは、四五年の時卓でとても大きな問題だったと思います。だからこそ、朝鮮史は

とりわけ朝鮮の民衆が、長い歴史の中に、さみだまの苦労を重ねながら、自分自身と全体としての社会の解放、あるいは豊かさを願って闘ってきたところに原動力がある、との国にも劣らない優

れた内容を含んだ内側から発展した歴史であることを確かめる仕事に、取り組むことには、たのだううと思います。その中で、ねじ曲げられ方が一番甚だしかった李朝末期の歴史、特にその社会や民衆のあり方についての研究が、最も意欲的に進められたと思います。具体的な例でいきますと、

明治末期、日本が朝鮮を植民地化するころ、福田徳二という経済学者博士が、当時の朝鮮を一週間程かけ回りました。そして、朝鮮社会はどういう社会であるか、という論文を書きました。そして、朝鮮社会は日本でいえば藤原時代に相当する停滞した社会であるという、まさに思い切った結論を出したわけです。それがいわば、当時の日本が朝鮮を植民地化しようとした時流に、あるいは当時の言葉でいう国策に奉仕する道だというので、日本人の中でもうける議論になつたことがあります。

朝鮮の歴史は他律性史観によ、ことらえられる主張した。他律性史観というのは、朝鮮民族とい

うのは、自分の力で国の歴史を発展させる力がないのだとか、日本が朝鮮を植民地にしその上で教育が行なわれるようになると、日本の権力者は植民地支配に対し教科書なんかにこう説明しようとすると、つまり、朝鮮は國が乱れてどうしようもなく、自力で近代化していく力もない。だから日本が入って近代化に導いてやるんだ。それが日本民族の使命であるというわけです。すなわち、植民地支配を正当化するための前程として、日本が侵略する以前の朝鮮が、できるだけみすばらしくダメな社会にする必要がある。そのことを日本人だけでなく、朝鮮人に対してもそう想い込ませることに、かなり明白な意図があったのだと思います。

では、そういう歴史観が、本当にそうだったのかということが問題になります。大まかにさうじやないといつても、それだけでは足りないわけですから、としてそういうのはないということが証明できなければ説得性は持ちません。そのため多くの

次に、事実はどうだったのかということについて、少し述べてみたいと思います。初めに大まかなことをいうと、東アジアの三つの国—中国、朝鮮、日本—とりあげて中世から近代への歴史の歩みをみると、大同小異であったといえます。中国文化は少し別の要素が入ってくるのですが、中国文化の影響を受けながら、古代から中世、中世から近代への歴史の進み方は、日本と朝鮮に因っては、

朝鮮人にとっては、もとと切実な問題があると思います。朝鮮人としては、自分達の属する優れた文化、歴史というものが、なにもあれ様だけが信じ込んだと云ふことはなくて、どの民族もがも、こゝに共通したもの、その中でモとりわけ独自の歴史を持つ、こゝるんだということ、何も日本民族が一段上位と思へる必要はないんだということも、事実、実感として確かめることができることだといふことが、歴史の専門家による人でなくこそ、も、も、と切実な意味を持つと思うんです。

恐らく、朝鮮の歴史家の問題意識も、そういうところからきたと想います。現在、少なくとも実証的な歴史の範囲で、南北を通じてたどりついてこゝる結論は、内側からの發展の芽はあるたゞいところと云ふ、さうに日本と朝鮮がほぼ似たような歩

みをたどってきましたことも、もはや研究の世界ではほほ実証のみだといえます。では具体的にそれはどういうものか。このような結論を頭に置きながら、次にその話を少しだらりと話していきます。

2 資本主義萌芽とは何か

比喩的にいえればふたつの兄弟といつていい程、良く似た歴史の過程をたどってさ在といえます。時に封建社会の末期、その内部からどのように新しい社会に向っていく芽が生じたかという問題に限る場合にも、細かいところでは違ひはあるが基本的には十七、八世紀からそれに向う歩みというものが、それらの社会の中で独自に進行していくめでいる。それが、なぜ一方の日本が帝国主義になり、朝鮮が植民地になってしまったのかということですが、それは外国の圧力による開国の時期のちょっとした政治的ないきさつの違ひなど、やがて大きく拡大していき、近代に入つてから別れ道になつたのだと思ひます。一八六〇年、七〇年そりから日清戦争ぐらいの時期にかけて、ラリう別れ道が生じてくることになります。ですから、たとえば曰本民族が古代以来、あるいは日本以来、朝鮮民族より一段階上である、といふような言い方には何ら根拠もなく、まさにそのようないい方には何ら根拠もなく、まさにそのような考え方こそ植民地支配の後遺症であり、我々自身がそらう考え方染まり続けているならば、日本人自身が今後どう生きていくのかという道が狭い袋小路に入つていうことにはうだらうと思ひ

が苦心して次第に明らかにしてきたことですが、
この国でも一つの法則を持つてゐます。その法
則の中で、封建社会から近代社会へ向う段階では、
封建社会の内部から古い社会をつきくず可動きの
芽になるようなものが生まれており、それを資本
主義の萌芽という言葉で表わします。具体的には
何かというと、少し難しい言葉ですが、商品経済
が一般に広く展開するようになることをさしてい
ます。その中から今までの封建支配者、朝鮮社会
でいえば兩班ルバンが支配していいる社会でやつと生きて
きた農民が、新らしく、たとえばハタ織りなどの
仕事場を持ち、たりして富をたくわえるものがでて
くる、同時に労働者の卵も生まれてくる、という
ように労働力までが商品になる程經濟のしくみが
変っていくということなんです。

(1) 場市^{チヤウシ}の發達^{ハツタツ}

古い社会では農民は、自給自足的な経済のしくみの中にとじ込まれていてやうですが、そうではなく自由に自分で生産したものを持ち、市場で売り、生活を多様、豊かにしていくことを農民がやっていく、そういう内容を持つのが商品経済でそれが発展していくことが古い社会を崩し、やがては4

新しい社会の原動力となるのです。

朝鮮社会では、そのような傾向が十七、八世紀頃に目立つて顯著になります。たとえば場市^{マジシ}一五日に一度市が開かれる日がきまっていて、そこへ近郷中の農民が集まり、自分の畠でとれた作物や自分の手で織った綿布を売り、そして必要な品物を手に入れていくような場所です。生れたばかりの萌芽ですから、ちっぽけなものです。しかし、生れていることが重要な問題なのです。

場市は、当時の朝鮮の文献によれば、朝鮮全国で千余ヶ所あつたといわれています。当時朝鮮の郡は南北合わせて二百余ですから、一つの群に五ヶ所余りで、場市間の距離は平均十キロ前後、しないがって、かなり山奥の農民でも朝市へいっても夜には帰ってこれるわけです。この密度が、大切です。社会の発展、進歩がどこにあつたかを見る時、巨大な王様の住んでいる都市がどれだけ立派であるかということは、あまり問題ではなく、ちっぽけな場市みたいなものが、全國いたるところにあって、どこに住んでいる民衆もそれに参加できるといふことが、かなり大きなポイントだと思います。

大して地主になつたものです。これはヨーロッパや日本の歴史では、農民層分解という言葉で表われますが、商品経済の中で農民層がどれだけ階級的に変わったかということは、社会全体としても大きなポイントになることです。

十九世紀の中ばぐらまでは、いくつかの部内で手工業が次第に発展していき、マニファクチャーや言えども十人位の労働者が一つの工場で働いており、それそれが流れ作業的に異なる人というように、分業することによって能率をあげるしくみです。ですから生産させるための経営者みたいなのがいるわけですが、「ここぞ言えば、庶民地主なんかが、場所を提供し労働者に賃金をねつけていたといえます。ちっぽけではあるが、こんな日の資本主義のひな形になるわけで、そういうものを整えていいる意味で、マニファクチャーは資本主義の萌芽が、どれくらいでできているのかを、手取り早くつかむための、一つのポイントになると思ひます。

マニファクチャーが、開国前におもかじうか

まだこの時期には、常平通宝という銅錢が、5銭でも事実でも確かめられています。さらにこういう例もあげることができます。すなはち、商品經濟が盛んになるにつれ、生産した商品を売り買ひする中に立つ商人というものが必要になつてくる。そういう商人達の商業が盛んになれば、それだけ商品經濟の規模が複雑には、たということを証明する一つの例だううと思います。このよろな例は、手形に類するものが李朝末期に生まれていたとかいろいろあります。ひとおぼしこれだけにします。記の原理にのつたもので、朝鮮の商人達が独自にこれをあみ出したということを証明する城簿記があります。要するにこれは、複式簿記の原理にのつたもので、朝鮮の商人達が独自にこれをあみ出したということを証明する一つの例だううと思います。このよろな例は、手形に類するものが李朝末期に生まれていたとかいろいろあります。ひとおぼしこれだけにします。

(2) 庶民地主の発生

解放後の研究でわかつたことに、兩班封建地主とはだいぶ性格の違う庶民地主が、このようないくつかの部内でもそれがあつたということが、解放後に確められています。具体的には鎌器の手工業がそれで、定州、開城、安城など、全国向ヶ所かの鎌器の生産地では、いずれもマニファクチャーというものが現われはじめましたことが確かめられています。その他、鎌物工業の部内も、同じように

ますし、その他、鎌物工業の部内も、同じようないくつかの部内でもそれがあつたということがあります。具体的には鎌器の手工業がそれで、定州、開城、安城など、全国向ヶ所かの鎌器の生産地では、いずれもマニファクチャーといふや紙の生産の場合には、まだはつきりマニファクチャーとはわからぬんです。規模からいえば、マニファクチャーに近いものもあつたんですねが、大部分はそのもう一步年前の段階である、そういうようなことが、部内的に一つ一つ研究されてきているわけです。

3つの思想的背景

以上のことと、漠然と經濟のしくみが變つてきているのだなといふことは、わかゝこもらえたかと思います。もちろん經濟がひとりでに変化するわけではないですね。經濟は、人間がいこ初めて成り立つものであつて、人間が動かして經濟を変えていくものなのです。

経済のしくみを変えることは、一つの圖11です。

要するに、封建西班牙階級からいえば、そういうものが生まれてくることは好きくないから、できるだけ抑えようとしてます。それにもかかわらず、抑えられてもそれと同時に経済が発展していきます。それは具体的には、西班牙階級に支配され封建社会の中で苦しんでいる農民が、自らの解放生活の向上、精神的な自由への欲求などから、実力特に経済的実力を持たなければならぬとして、その基礎をきずいていく。また逆に、豊かな経済生活のためにも、封建的な束縛を打ちやぶらなければならない。そういうことを次第にみんなが悉くするようになって、農民の闘いが發展し、西班牙階級が次第に後退していくわけですね。そういう意味でこの時代というのは、単に経済が変わったというよりも、それと関連して民衆意識が大いに変わったということが、政治や文化の面でもはっきり現われてくる時期だといえます。

(一)朝鮮の封建社会のしくみを、ごくかいつまんで話します。それは、たとえば日本のものとは本質的に違わないんですけど、上の方のしくみが少し違います。中央集権的で、日本の大名にあたる郡守は三年を原則として交替する中央から派遣された官僚です。官僚の家柄に結びつく身分が取

班です。もう一つの邊には、日本では武士、すなわち武力で支配するのに対し、朝鮮の封建社会は、もちろん武力そのものは國家が握つてゐるだけですが、個々の両班は武力を持たない。いわゆる文官であります。ここでは文とは儒教、その中でも朱子学を意味します。つまり朱子学を武器として支配したわけです。

朱子学のものの考え方をひとこと。人が人を差別するのは当然なんだという理論です。両班は生まれながら両班で、両班らしく生きなければならず、両班として優れた人間が、そうでない民衆を榨取して豊かなくらしをするのは当然だという理論なんですね。そういうものの考え方を支配者である両班が持つだけではなく、民衆の中にもそれを広めたり、民衆が自からそういう考え方で、どうせおれは農民の生まれで、両班には及びもつかないと、あきらめの気持ちにしくんでいく。そういう支配の武器として、朱子学が使われたわけですね。ヨーロッパのカトリックがこれと似ていますが、とにかく朱子学に逆らった異端のものの考え方をすれば、一つの村から追い出されるだけではなく、中央集権的な形ですから國中どこにも住む場所がない、いわゆる逆賊になるなどとおどしを

(1) 実習手帳の用語

両班階級のそういう封建社会の支配の中で、それに対しても耐える人間がどのようにしてでききたかということが、実はこの時期の、つまり資本主義の萌芽とされていいる時期において、より大きな問題かもしれません。そういう人間が両班階級の歴史の発展を抑えようとする力に逆って新しい商品経済を発展させ、自からも豊かになり、社会の生産のしくみを、知識や技術も含めてですぬ、次第に発展させる形で進んでいたんだということなり、大きくなると思います。

(1) 実学派の思想

朱子学の權威に逆う新しいものの考え方の一つとして、まずこの時期には実学派という思想が登場します。丁若鑑（ジョン・ヤクジン）、朴趾源（パク・ジヨン）という人が、その中でも最も優れた人です。ただ、実学派の学者といふのは、彼ら自身農民ではなく、両班社会で冷めしを食っていた部分なんです。一応農民は學内と切り離されこいたから、新しい思想が両班階級の一部から最初に打ち出されたことは、ある意味ではやむを得ないことです。しかし、そういう人達が、自分達だけでそういう考え方を生み出したの

これはなく、やはり農民のものの考え方を反映したものと云って、間違いないと思ひます。

奥学派は、身分制度によつて人が人を差別するのではなくセンスであるという議論とか、商業を大いに興こしで、古い封建的な経済よりも、と豊かな社会にしていくべきだというような議論を盛んにする。さらに人を恐怖におとし入れ金縛りの武器としての役割りを果たす迷信などに対しても、そういう迷信はおかしいじゃねいかと、勇敢に問題提起する。また、自から歴史や文化、民族を尊重しながら風潮に対し民族的なものの考え方を強く打ち出していくわけです。さらに一步進めて、少し空想的ですけれども、すべての人があくまで尊重される社会をこうして作るんだという、社会改革の議論も打ち出してきます。その背景には、支配のめちゃくちゃなやり方で、農民が本当に食つていけない状況があるわけですねけれども。

これを文学的に表現すれば、空想的物語になります。ヨーロッパにユートピア物語というのがあります。朝鮮でいえば洪吉童伝がそれにあたります。洪吉童というのは、両班の力の及ばないある島を根柢にして、その島はもちろん平等な社会が作り出されているのですか、時々島から本

土へ出かけていっては、横暴な両班をこらしめ

不當にたくわえられた米などを没収し、その地域

の農民に分配する、いややる義賊ですね。それを

主人公にした物語が、大勢の人々に読まれるには耳から伝わって、そういう考え方がどんどん広まつたということは、重要な意味を持っていると思います。泥棒と呼ばれているが、あいつはいいじやないか、おれもそんない島へ行つてみたいなどいふ時、さらには両班さえ追い出せばそういうことができるのでないか、というような気持をおこさせると、かなりの役割りを果してゐると思われるからです。

要するに、こうした社会の風潮を反映して、實学派の思想家達が封建社会の權威をやるがすものの考え方を打ち出し、同時に技術や生産力を高めるための現実的な學問の研究も進めていくわけです。そのうち、こんどは庶民の中から知識人が生まれてくることになります。もちろんそのためには、庶民の間にある程度教育が普及していかなければなりませんが、ちょうど日本の寺小屋にあたる書院というものが、全国の津々浦々にでき、民衆に初步的な學問をさしきるのに大きな役割りを果していきます。これは、農民の技術、知識に対する

関心の高まり、およびある程度の經濟的ゆとりを示すものだといえましょう。

(2) 東洋思想

当時の農民の生活、意識がどのようなものであったのかということについては、数多くのエピソードがありますが、結局こうした農民の意識が社會を發展させる原動力になつたわけです。その卓であるらしいのが東洋思想ですね。一八六〇年頃に生まれました。東洋思想を生み出した人は両班ですが、人はすべて平等であるということを徹底して主張したため、広まつたのは農民の中です。

時の李朝政府から、これはとんでもない異端思想だということで迫害を受け、初代の教祖は死刑にされてしまひます。

この東洋思想というのは、理屈ばかりで押し壓くるものではなく、表現のし方は非常に感覚的で、近代の個人主義思想と同じ内容ではないかとされています。後の開化派が、ヨーロッパの言葉をそのまま受け入れて使つたことに比べ、東洋が農民にわかりやすい言葉で思想を教えたということでもどういうことはないか、どういう暗たりがあるのか、ということを、態度で示す意

味があつたように思われます。だから王様の両班からみればとんでもない思想ということで彈圧が激しくなる。逆に農民の側は、これはおもしろいやといふことで、その中で人と人とは平等であるという思想を、次第に身につけていたのだと思ひます。だから東洋思想は、当時の農民の合作であるという側面が強く、その意味で、開國前王様を恐れない思想が、どれ程広まる、こいだかを示す材料になると想ひます。

東洋の思想の中に「人を天し」という言葉がありまや。これはここ一ヶ年意味での近代思想です。

朱子学で天といふのは、人間の靈命まで支配する絶対的なもので、これを天命としています。社会政治について言えば、天が民を治めるよう命じて治めさせているのが天皇、すなはち王様で、やはり天の命令で王様を助けているのが両班であるという考え方です。にから、天と人との關係は、天は絶対的であるのに対し、人間といふのはきわめてちっぽけなもので、貧しい農民は、そういう状況をも天命だとあらめて、島風に生きていしかねない、ということになるわけです。それに對して人々天皇は、それをひっくり返した考え方であります。人はだれでもやむち天だということは、つ

(3) 中人の出現及び農民鬭争

李朝の末期に、両班と平民階級の間に、平民階級の中から中人といふ中間階級が現れます。中人階級とは技術者です。医学、数学、翻訳学、特に医学が主ですが、それらの技術のため、はくことはならぬ存在として、官吏のような生活をしていました。數はそう多くはないが、知識を持ち、さらに知識を通じて開明的なものの考え方をも持つようになります。開化派の金玉均の先生として有名な劉濟基、吳慶錫という人がそうで、自からが得た開明的な考え方を、両班の子弟で有望そうな人にそういふ考え方を広めることによつて、社会の改革を促すとしたわけです。そういう人が現れてくることも、また別の一つの例にはると

思います。

このように、あらゆる面で民衆自身の実力が脚りえられていきます。最終的には、経済の面でも自分の力で農民が生きていけるようになります。それだけでなく、自分の力で生産力を発展させる段階にまで達するのです。それまでは、ある意味では農民は自分の力だけで生きていけることができます。しかし、生産力の低い段階では、飢餓などの場合、両班から米を借りて生きのびるしか方法はなく、そのためお上には抵抗しにくいという意識があつたわけです。

しかし、商品経済が発展する中で、農民達は自らの力で、大がかりな水利工事をしたり、新しい農地を開拓したりして、生産力を向上させていった。ところが両班は、農民が新しい農地を作るその後からやつてきて、そこででききた作物をすべてかきちらおうとする形になるのですから、対立はますます激化することになります。李朝末になると、農民闘争が激化するのは、そういう関係にあるためなんですね。

農民はものゝ考え方としても、お上を恐れなくなっているし、まして収奪のしがかなり乱暴にはつてゐるから、ますます農民の抵抗は激しくな

なる。そういう歴史の中で、やがて次の時代へ移っていきます。新しい時代の潮流が生まれて、ソードとして、甲午農民戦争があります。

甲午農民戦争は、古阜郡郡守のむちやね水利規画に端を発し、反封建的性格を持って全国化した農民の闘いですが、やがて日本の武力で抑えられてしまふ。せっかく生まれかけていた新しい社会の芽がつみ取られたわけです。そして日本は、その上に別の植民地のための経済を作り出していく、いわば二重に悪いわけです。

にもかかわらず、両国後といえども朝鮮社会内部で生まれた資本主義的な動きは、外圧という悪い条件の中で細々ながらそれと対抗しつつ、独自の経済を発展させていこうとするわけで、それが國際政治運動の支えになつてゐたといえると思います。

この時代というのは、百年前のかなりとんだ時代ですが、外がいから影響に基本的にはまだ左右されない中で、朝鮮の中でどれだけのものが生まれていたのかということを確かめることは、かなり今日に結びついて考えることができます。

本 書 韓國からの通信

「世界」編集部編

本書は雑誌「世界」に毎月、韓国で民主化斗争を続けている人々の貴重な情報を寄せており、丁・K氏「韓国からの通信」の一九七一年一月から一九七四年六月までを一冊にまとめたものである。今年一月、緊急措置オ一號が発令されて以来、日本の商業ジャーナリズムのはんべが自己規制を続け、或は最近ではとりわけ日韓両国政府の代台議院による役割を發揮している中で、私達は毎月この貴重な報告を心待ちにしている。情報の閉ざされた困難な状況で書かれて来るこの通信は、ありもしない「自由な報道」の氾濫する日本の報道では得られないものを与えてくれるからである。

今、一冊にまとめられたものを読み返してみて、筆者の状況を見通す目的の観察に改めて驚かされる。それは、筆者が無数の犠牲を覚悟した孤独な、しかしにものにも驚かれることのない魂を持った

シイを続ける人々とヒモにあるからであろう。筆者自身もまたKCIJAの手が伸びる危険を感じているヒリウ。

生きようとしても死。坑つても死。それでもなあかつ、抵抗を盡ぶ人々。へわれわれはわれわれの子孫たちに、臆病で正当な主張ができるなかつた女工達。若い人々の犠牲を見るに忍びず、老いた身をさげようとする人々。学生のデモを支持し、学生の処罰に反対しただけでKCIJAに連行され、取り調べ中へ投身自殺をしたと発表されたが、實際には拷問によって虐殺された崔鐘吉教授。これら、朴政権の独裁と対日韓属に抗して斗争する学生、知能人、言論人、宗教人等の姿は、安穩に生まる私達を激しく搖さぶる。

私達はこの通信を通して、私達に課せられてくる課題をひき出しながらなければならない。韓国との重苦しい状況は朴政権が生みのびるために生じたものであると同時に、日帝の欲望を実現させたのである。ハコトは正しいこのものであるからである。ハコトは正しくこの追求というよりも左の右へんあまりにも頗く考へすぎている。そしてどこにこうんでも自己の利益だけを求めるというのが多くの韓国人の